

『研究レポート：イスタンブールで学会発表を行いました』

2018年の6月27～29日にイスタンブールのコチ大学で開催された第三回「手話言語習得の国際学会 (International Conference on Sign Language Acquisition, ICSLA)」にて、明晴学園の言語発達研究チーム（松岡・林）がポスター発表を行いました。



コチ大学は、アタチュルク国際空港から車で約1時間の郊外の山の上にある、まだ新しい大学です。まるでリゾート地のようなキャンパスですが、入試はとても厳しく、この大学の教員になるにはアメリカの有名な大学院の博士号が必要だそうです。



ICSLA は、手話の発達（第一言語）や、手話の学習（第二言語）、バイリンガリズムなど、手話の発達・習得をテーマに扱う国際学会です。2013年に第1回（リスボン）、2015年に第2回（アムステルダム）が開催され、今回は3回目でした。アメリカ、カナダ、ドイツ、イギリス、オランダ、トルコ、香港など、聴者とろう者の研究者が多数出席しました。

学会の公用語は、英語・アメリカ手話・トルコ手話・国際手話でしたので、ステージには常に3名の手話通訳者がいました。

基調講演や招待講演では、音声・手話に関わりなく、子どもが言語を覚えた時期によって、数の理解や手話の音韻の判断に大きな違いがあることが説明され

ました。手話学習者のロールシフトや見本動画表出テストの開発に関する発表もたくさんありました。最終日には、ヨーロッパ全体のBiBiろう教育の現状の調査結果の発表もありました。



明晴学園の研究チームのポスター発表は、第一日目に行われました。デフファミリーのろう児の自由会話を録画し、0歳～3歳が使った1557の手話単語の手型を分類・記録したものです。

(1) 手型の発達はアメリカ手話で早くから研究されており、習得が早いものから遅いものまで、4つのグループに分類されています。日本手話の場合も、大まかには同じようなパターンが観察されました。

(2) アメリカ手話の研究では記録されていない手型の使用時期が記録できました。

(3) 子どもがよく使う手型は、ほとんどの場合、保護者がよく使う手型でした。

(4) 親指だけを曲げたり伸ばしたりする手型は、遅い時期に観察されました。

(5) 親指や小指、人さし指を伸ばす誤用が観察されました。

これらの観察は、普段幼いろう児に接している人から見れば、「当たり前」のことが多いのですが、複数のろう児で同じ方法で記録することはとても大切です。ろう過程のろう児の「典型的な」手型の発達の流れがわかっていると、発達過程の指針（目安）を作成して、他のろう児の言語発達の遅れを発見して適切なサポートをすることができるようになるからです。



最終日の午後は、手話教育ワークショップがありました。日本でも使われているナチュラル・アプローチを使った手話の指導法について、オランダのろう者がリーダーになって、主にトルコのろう者に情報提供をする内容でした。



手話の発達をテーマにした学会はとても少なく、ICSLAの開催も欧米で2～3年に一度です。今回の学会出席で、海外の重要な研究成果について知ることができました。手型のような音韻発達のパターンは、手話発達の研究の基礎になる情報ですので、明晴のポスター発表に関心を持つ人が多かったです。これからも、言語発達研究へのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

《松岡 和美・林 雅臣》